

# 今や超難関の1級建築士試験で合格者占有率ナンバールワンになった「総合資格」の勉強術

耐震偽装問題を教訓に2007年6月20日に改正建築基準法が施行されたが、行政はさらに信頼性を高めるために昨年11月28日に改定建築士法を施行、今年度(7月)から1級建築士資格試験にも新制度が導入される。

(本誌/大和賢治)

## 求められる専門性

今回、導入される新試験制度では、将来的に高度な専門知識を有する建築士の数を増やすことが狙いとされ、試験はより難関になると予想されている。

1級建築士資格試験は、1次



岸 隆司氏  
岸 隆司氏  
ンや設計事務所

などこれまで以上に厳格化されることになった。

1級建築士は団塊の世代のりタイアが始まった2007年以降、大手ゼネコンや設計事務所

の学科試験と2次の設計製図試験からなるが、新制度により1次試験が4科目から5科目に細分化され、2次試験では、新たに構造設計、設備設計の基本問題も出題される。その他、受験資格も所定の学科卒業から指定科目の履修に学歴要件が変更される

では不足がちで有資格者の確保が緊急課題といわれる。前年度の1級建築士の学科・製図の総合合格率はわずか8.1%の狭き門だ。この結果からもゼネコンや設計事務所が1級建築士の確保に躍起になるのも理解できる。

このように超難関に変貌した1級建築士資格試験にあつて、業界内で存在感を高めているのが「総合資格」だ。同社の昨年度の1級建築士資格試験合格者(設計製図合格者)占有率は約6割弱(57.7%)。合格が狭き門になる中、なぜ総合資格は合格者占有率を高めることができたのか。「われわれは、建築士のプロ集団

です。専門性の高い講師陣約1千人がそれぞれの分野で出題傾向を分析し、対面で受講生が原理・原則を理解するまで徹底的に指導しています。試験が難しくなればなるほどわれわれは強さを発揮できるのです」と総合資格の岸隆司社長は高い合格率の秘密を語る。

同社の講師陣は、現役大学講師の他、建築事務所やゼネコンの施工部門など第一線で活躍しているプロ中のプロを配置、現状に即した多くの情報を授業に反映できるのが強みだ。

「耐震偽装問題以降、試験内容も大きく変更されました。例えば、設計・製図でもこれまでではデザイン性が考慮されるなど自由度がありました。しかし、現在では、狭い敷地であつてもきつちりと建築することができるよう実務に即した知識が求められるようになっていきました。さらに言えば、学校や建築士事務所ではCADが一般的ですが、国の試験は、いまだ手描きです。そこ

が必要となるのは、制限時間内に正確に早く描くことです。重要なのは出題傾向をいち早く分析し、受講生に基礎をしっかりと植え付けることです」(同)

## 双方向が合格への近道

基礎からの理解を実現する肝となるのが、インタ・ライブ(双方向講義だ。同業他社ではビデオ講義を中心とした授業を行っているところもあるが、実際に講師がいないと、理解できなかった部分を克服するのは困難だ。

「対面のほうが受講生の理解度は確実に高くなります。理解度は人によって違いますから双方向でどこができるのか個人指導を徹底します」(同)

その一方で、受講生の講師陣に対する満足度を確保するため、以前のアンケートでは、満足・不満足との2者選択形式を採っていた。しかし、これでは満足していても多くの受講生は満足

と妥協した選択をしてしまう傾向が強くなる。そこで「普通」という項目を加えることで受講生の不満足という潜在意識を顕在化することに成功した。

「普通」はイコール不満足。できない講師ほど生徒のせいにする傾向があります。しかし、高い授業料を払いなおかつ会社で資格取得を要請されて受講されている方が大部分です。資格を取得することで報酬アップが約束されているにもかかわらず、ヤル気がないということは考えられません。ヤル気のある受講生が結果を出せないのは講師に問題があるからです。そういう講師は登壇させません」

と岸氏はきっぱりと述べる。しかし、その一方で、1級建築士合格は生半可な努力では到達できない。

「個人差はありますが、初めての受験では11月から7月までの約9カ月間で、当学院の講義は200時間ありますが、合格するにはその他、家での勉強時間が

700時間必要です。最低でもトータル900時間の勉強が必須です。差は学習量でつきますから、最低でも8割の出席と8割の宿題提出を受講生に義務付けています。これで、合格は約5割です。早い人で2〜3年はかかりません。ある意味、大学受験よりはるかに難しいのです。現在では大学在学中から試験に備える人も増えています」(同)

7月に開催される学科試験の合格者には、10月に設計製図試験が行われる。その間、約10週間は講師が受講生に付きつきり徹底指導、学習時間は、1日10時間を超えることもあるという。

建築業界には、日進月歩で新しい技術が入ってくる。また行政も建築物により高い安全性を求めるのはもちろん、環境対策やバリアフリー対応等、実社会に即したガイドラインを提示している。当然、出題傾向もこれら現状を考慮した出題になることは容易に想像できる。そういう意味では、情報力の差が暗喩を

分けると言つても過言ではない。「当社では、受講できない独学の人を対象に受験参考書の出版事業も行っています。これまで競合他社で出版されてきた受験参考書は、過去問題が中心でした。しかし、毎年、建築業界を取り巻く環境が変化する中では、明らかに不十分と言わざるを得ません。当社は現場の第一線で活躍されている講師からの情報を基に受験参考書の制作を行っているのが強みです。既に受験参考書のシェアは50%を超えていることから見ても、試験対策には最適な受験参考書であると実証されています」

と岸氏は情報量に絶対の自信を持つている。1級建築士資格試験は、今後より難関になることが予想される。1級建築士を目指す人たちにとって同社の双方向講義が本領をさらに発揮することになるのだらう。岸氏は「合格者占有率を8割まで引き上げたい」と意欲満々だ。